

**遠野遥『改良』論**  
**——男性性をめぐる傷つきの物語——**  
**Facing the Wounds about Masculinity: Haruka Tono's *Kairyō***

游 書昱  
YU, Shuyu

**摘要**

This article proposes a rereading of Haruka Tono's *Kairyō* as a novel which addresses the issue of masculinity-related wounds through the experience of the protagonist "I". A tendency has been shown to regard the issue of "I" as a general kind of harshness of life. Nonetheless, both the sexual victimization "I" encounters, and the cross-dressing aiming for disembodiment supposedly are deeply associated with masculinity. If so, taking up the issue of "I" without gender perspectives may lead to overlooking its association with masculine norms. This article attempts to comprehend the protagonist's sexual victimization experience and cross-dressing in the light of masculine norms, and demonstrate how they are presented as an issue of masculinity.

**キーワード**：男性性、男性の性被害、女装、脱身体化、他者からの承認欲求

**Keywords**: Masculinity, Male sexual victimization, Cross-dressing as women, Disembodiment, Desire for recognition from others

**1. はじめに**

『改良』（河出書房新社、2019年）は、第56回文藝賞の受賞作である。作者の遠野遥は文藝賞の受賞後、さらに『破局』（河出書房新社、2020年）で第163回芥川賞を受賞し、現在注目されている若手作家の一人である。

男性主人公の〈私〉は小学生の時、スイミングスクールで知り合った同学年のバヤシコというあだ名の男の子に性暴力を受けるが、そのこと自体が〈私〉に忘れられたかのように、物語は進んでいく。大学生になった〈私〉は美しい女性に羨望の気持ちを抱き、女装の研究に没頭する。ただ、〈私〉が女装するのは女性になりたいからではなく、あくまでも承認欲求による行為である。〈私〉は女装の研究を重ねていくと、自分の女装姿を人に見せたいという衝動に駆られる。その衝動のせいで、〈私〉は再び性暴力に遭ってしまうが、そこで自らがいかに心の傷を抱え込んでいたのかについて気づくのである。

本作品の読み方に関して、「ジェンダーやセクシュアリティや孤独を描いた小説だとは全然思わなかった」「この小説は […] 物事を型にはめて単純化しようとする圧力や凡庸さとの戦いの記録」<sup>1</sup>と、文藝賞選者の磯崎憲一郎がコメントしたように、川本直もまた「既存の型にハマったジェンダーを巡る小説と捉えるのは全くの誤り」「全ての固定観念や属性やアイデンティティに否を突きつけている」<sup>2</sup>と本作を評している。このように、この作品を個人にのしかかってくるあらゆる規範への抵抗を描いたものとして読むという傾向がみられる。ただ、ジェンダーも「物事を型にはめて単純化しようとする」規範の一つとして、そうした問題提起でも十分に問題化され得るにもかかわらず、なぜかジェンダーだけが意図的に後景化されているように思われる。男性の性被害という主題もそうだが、〈私〉が女装することを男性性の拒否願望の表れ<sup>3</sup>だとすれば、〈私〉の抱える承認欲求の問題は、男性性規範にも深く関係しているはずである。そうであれば、本作品をあらゆる規範への異議申し立てとして読むこと、また、〈私〉の抱えた問題をある種の〈普遍的〉な生きづらさと捉えることは、〈私〉の問題と男性性規範との関係性を捉え損なってしまうのではないだろうか。

そこで、本稿では『改良』にみる性被害と承認欲求の問題が、どのように〈私〉の男性性問題として浮上しているのか、ということに注目してみたい。男性の性被害と男性性規範の関連性を整理するために、まず、文藝賞選者の斎藤美奈子による選評を参照したい。

男性の一人称で言語化しにくいセクシュアリティについて語った作品ですが […] じつはこれ、性暴力のお話でもあるからなんだよね。 […] 彼が感じる屈辱と無力感は、レイプ被害者の感覚をほぼ正確に表しています。つくねの家に泊まった日の一件、女装姿の彼に対するカオリの反応と〈私〉の反発。この作品が秀逸なのは、多くの女性が共有しているだろう感覚を、男性主人公を通して描ききったことでしょう。(斎藤、前掲選評、91頁)  
「多くの女性が共有しているだろう感覚を、男性主人公を通して描ききった」という評価には、主人公の経験を女性固有の感覚を基準に捉えてしまい、暴力を受けた〈私〉が男性であるにもかかわらず、男性被害者ならではの苦悩が不問に付されてしまった印象を受ける。もちろん、男性被害者の心境や経験は、女性被害者のそれとは重なる部分もある。しかし、そうした「男女の性被害が共役するものと前提する」<sup>4</sup>というような捉え方では、男性当事者の特有のジェンダー問題は見えてこない。

リチャード・B・ガートナーの『少年への性的虐待——男性被害者の心的外傷と精神分析治療』によると、女性に性的虐待をされた後、その性的行為において自分は主導権を握っていたのだというふうに、被害の事実を拒否する男性はしばしば見られる。また、被害の当事者は加害者に反抗できなかつた自分に対して、許せない気持ちを覚えたりもするのだが、それは反抗できなかつたこと、つまり主体的に行動できなかつたことによって、男性として否定された感覚を覚えてしまうためだという<sup>5</sup>。そうした感覚は、「自分の責任において主体的に活動を行うこと」と、「女性に対して性的欲望を持ち女性を獲得しようとすること」を男性であることの

条件とする男性性規範<sup>6</sup>に深く関わり、性被害がいかに男性当事者の男性性に破損をもたらすのかということをも物語っている。そのため、「男でなくなってしまう恐怖」<sup>7</sup>から逃れるために、被害を認めずに〈沈黙〉を貫く男性も少なくない。ただ、自らの被害に対して心情を吐露しない・できないのは、それほど傷ついていないということの意味しない。深く傷ついているからこそ、その傷への向き合い方が分からないことがある。あるいは、そもそも自分が傷ついていることすら気づいていないこともある。特に男性の場合、弱さを見せないという男性性規範に縛られ、自分の痛みを語らない・語れない傾向がみられる。

一方、『改良』では性被害による男性性の損傷の問題と並行して、男性であることへの苛立ちが〈私〉の女装活動を通して描かれている。〈私〉は女装をすることを通して自らの男性性を脱ぎ捨てようとするが、それは〈私〉のなかにある、自分自身に向けられた男性嫌悪による行為だと考えられる。そこで〈私〉は、男性であることの閉塞感を自己否定という形で言語化し、男性ではない姿で他者から承認を求めようとするのである。

このように、『改良』は性被害と自己嫌悪を負う〈私〉の経験による、男性性問題をめぐる物語として整理することができる。したがって、本作品を読むにあたって重要なことは、男性が自らの痛みやつらさをたどたどしく言語化することに注意を払い、これまで〈普遍的〉な問題とされてきた男性の生きづらさを、個別的な経験のレベルで捉えなおすことであろう<sup>8</sup>。

以上より、本稿では、〈私〉の抱えた問題を〈普遍的〉な生きづらさと見なす読み方を逆手に取り、あえて『改良』を、〈私〉の経験を通して男性性をめぐる傷つきの問題を取り上げようとする、ジェンダーについて描いた作品として読み直したい。

## 2. 〈私〉の性被害経験にみる性暴力の支配性

主人公の〈私〉の男性性問題を浮き彫りにするために、この小説は二つの被抑圧の物語を用意している。一つ目の物語は、〈私〉が小学生の時にあった性暴力被害の話である。その性暴力の加害者はスイミングスクールで知り合った、「バヤシコ」という同学年の男の子であった。

スイミングスクールでは、〈私〉と同じ学年の男の子はバヤシコしかいなかったため、〈私〉は自然とバヤシコと仲良くなり、「互いに最も気の合う友人」にもなっていた。そのような二人の関係性には、男同士のホモソーシャルな関係の一面が見られる。

バヤシコは、〈私〉とのコミュニケーションにおいて度々性的興味を話題に持ち出す。例えば、ヨシヨシと呼ばれるスイミングスクールの女性インストラクターの前で、水着を膝までおろし、男性器をこっそりと出したことを自慢げに〈私〉に話したり、スクールの帰り道で近くの公園に寄って〈私〉に中学生カップルの野外での性行為を見せようとしたりする。しかし〈私〉は、「バヤシコは、その光景（中学生カップルの性行為）をなぜか私にも見せようとしていた」

（括弧補足と傍点強調は引用者）と、バヤシコの言動に疑問に思う。なぜ、バヤシコはそうし

た行動を取るのか。一見すると、これらの行動はただの子どものいたずらに見えるのかもしれないが、じつはそれほど単純なものではなかった。男性としてのアイデンティティを確立するためには、「女性に対して性的関心を抱くこと」は決定的に重要視される<sup>9</sup>。そして、男性集団の文化はしばしば女性との性的な関係を評価し合うことによって築かれるのである。そうであれば、バヤシコによるこれらの行動、言ってみれば性的冒険は、女性を専ら性的対象とする自らの異性愛を仲間の男性にアピールするためのものだと理解できる。

ただ、そうした男性間のホモソーシャルな関係性が成り立つには、仲間の男性による同調が必要とされる。しかし〈私〉が、「ヨシヨシの身体つきに、私は注目したことがなかった」と語るように、〈私〉はそのような性的冒険にはついていけなかった。公園でカップルが性行為を及んでいるのを二人して盗み見している時も、バヤシコが自慰行為を始めると、〈私〉はそれを見て「それは何なのか、それをするとどうなるのか」と困惑し、更にバヤシコの「お前もしたかったらしろよ」という誘いに対して「よくわからない」と答える。「興味のないふりがしたかったわけではなく、本当にわからなかった」という念を押すような回想のように、当時の〈私〉はまだ性への関心を抱いていなかったため、バヤシコの行動に同調することが全くできなかったのだ。このことがバヤシコに察知されると、〈私〉は直ちに〈仲間はずれ〉にされ、さらには思いもよらない酷いことに遭う羽目になる。

まるで女性には興味がないというようなことを口にする〈私〉に対し、バヤシコは突然「お前ってそういえばさあ、女子にあんまり興味なさそうだよな」「なんていうか、あんまり男らしくないしな」と言い出す。さらに、〈私〉の水着の形に対する違和感と、裸を恥ずかしそうに隠す行為といった「男らしくない」話を持ち出し、〈私〉の男性性を疑いはじめる。こうした〈仕分け〉は、前述の異性愛を前提とした男性集団の文化に依拠しており、男性間の序列を作りあげることにつながっている。男性間の序列関係は、男らしさと女らしさの二項対立、即ち二分法的なジェンダー観にも基づいているが、その序列関係において、女性に対して性的興味を示さない男性は直ちに女性化され、女性と共に下位に位置付けられ、迫害に遭う恐れに晒されてしまう<sup>10</sup>。こうした抑圧の構造を再現するかのようには、バヤシコは、「たぶんお前は身体は男で心は女」「男みたいに見えるけど、お前は女だ」と言い放ち、最終的に〈私〉の性器を触り、強引に性的行為を及んだのだ。

ここの強引な性交渉に関して、〈私〉にしてみれば、〈私〉は確かにその性交渉において勃起していたが、それはあくまで「私の身体が外部からの刺激に反応して勝手にやっていること」という生理現象に過ぎなかった。一方、バヤシコの言動は、〈男らしくない〉とされる〈私〉に女性性を見出すこと、つまり〈私〉を性的対象物の〈女性〉として見立てることを通して、女性ジェンダーに欲望をぶつける行動だと思われる。女性っぽい男性を欲望するのも男性同性愛のひとつの類型だ<sup>11</sup>ということから、その性交渉を同性愛的行為だとみなすことはできなくもない。しかし、その性交渉自体が同性愛なのかどうかと区別を立てるのは、ここでは重要で

はないだろう。そもそも性暴力は、必ずしも性的欲望の解消を目的とするわけではない。ここで注意を払わなくてはならないのは、バヤシコはその性交渉を通して自らの力を誇示できてしまうという点なのだ。この点に関して、心理臨床の現場で加害と被害の問題に取り組んできた藤岡淳子は、以下のような認識を示している。

性暴力は、性的欲求によるというよりは、攻撃、支配、優越、男性性の誇示、接触、依存などのさまざまな欲求を、性という手段、行動を通じて自己中心的に充足させようとする「暴力」であるという本質を、明確に認識する必要がある。<sup>12</sup>

もちろん女性の加害者も存在するのだが、支配と優越が、男性性の構成に深く関係しているものとして考えられてきた<sup>13</sup>ということを考慮すれば、性暴力は男性性の達成の手段としてあるという側面はやはり大きい。そのため、性暴力は相手を支配される側に押し込み、自らの支配的力を誇示するような行為だと理解する必要がある。

このように〈私〉は、バヤシコとの関係において異性愛・男性中心主義によって被抑圧の位置に置かれるのだが、二人の非対称的な関係性を成しているのは、じつはもう一つの要因がある。すなわち、二人の体格差である。

バヤシコは私より身体が大きく、力も強かった。喧嘩をすれば、まず勝てないだろうし、そもそも喧嘩をしようとも思わないような、そういう相手だった。(遠野遥 [2019年]「改良」、『文藝』58(4)、河出書房新社、53～54頁)<sup>14</sup>

二人が体格的に差をつけられても、バヤシコの勝手な行為に怒りを感じた〈私〉は、バヤシコの勃起している性器を狙い、反撃を仕掛ける。

バヤシコの性器は、世界に向けて堂々と誇らしく自分の存在を主張しているように、私の目に映った。私はそれが憎かった。まるで悪の権化のように感じられ、こんなものがこの世に存在してはいけないと思った。私はバヤシコの性器を狙い、思い切り殴りつけようとした。(54頁)

しかし、その反抗攻撃は上手くいかず、かえってバヤシコを逆上させてしまう。激怒したバヤシコは、〈私〉より大きい身体と強い力を利用し、〈私〉を押さえつける。そして今度は、〈私〉に性器を触ることと、オーラルセックスを強制してくる。

(腕をひねることを) やめてほしいかと、バヤシコが私の耳元でささやくように言った。私は頷くしかなかった。「だったら、オレの言うこと聞け。約束だぞ。破ったら、わかるよな」私は再び頷くと、バヤシコは私の腕を離した。バヤシコは仰向けになり、自分の性器を触るようにと言った。そんなことはしたくなかったが、私に拒否権はなかった。(54頁)(括弧補足と下線強調は引用者)

「お前、下手だな。全然だわ。もういい」／私はバヤシコの性器から手を離した。これで終わるのだと思った。しかしバヤシコは私に、今度は口を使うようにと言った。それは、私のせいだということだった。手で気持ちよくさせることができなかったから、その罰と

して口を使わなくてはいけないということだった。(54頁)(下線強調は引用者)

拒否権がないというのは、〈私〉に主体性が欠けていることを意味しない。それは、体格的に優位に立てない〈私〉が、自らをさらなる暴力から守るために、バヤシコの言うことを聞くしかないというだけのことである。圧倒的な力を持つ加害者の前では、抵抗することがかえってより酷い暴力を受けることを招く可能性があるため、多くの被害者は抵抗することにさえ恐怖を感じてしまう<sup>15</sup>。たとえ、被害者が男性であっても抵抗できずにいるということは、十分に考えられる。また、〈罰〉という表現から、そこには暴力による〈支配-被支配〉の関係性が明らかに出来上がっている。そうした関係性において、抵抗を実践するのがより難しいというのは想像に難くない。その意味で、このくだりは十分に抵抗しなかったのなら、被害者にも落ち度があるというレイプ神話<sup>16</sup>を問い直してもいる。そして、先ほどの引用にみる、バヤシコによる一連の言動は、自らの性的欲望を解消しようとするというより、やはり性という手段を通じて、反逆してきた〈私〉をあらためて支配下に置くという意味合いが強いと思われる。

このように、バヤシコと〈私〉の不均衡な関係性は、男性性規範と体格差による上下関係だといえよう。そうした関係性では、「男らしくない」男を女性として見立て力づくで抑圧するという暴力の特徴が浮上しており、〈私〉を抑圧してしまう。それで、〈私〉は自らの男性性が否定され、酷く傷つけられるというのは、想像に難くないだろう。しかしこの被害の経験は蓋をされたかのように、物語の終盤まで〈私〉に直接的に語られることはない。こうした〈沈黙〉は、まさに本稿のはじめにのところで触れた、男性の性被害の言語化の困難さを表象していると考えられるのである。

本作品の結末部では、〈私〉は自らの性被害経験に向き合うことになるのだが、その際、〈私〉の承認欲求の問題も同時に清算される。そのため、〈私〉がいかに性被害による傷に立ちむかうのかを検討する前に、次の節では先に〈私〉の承認欲求の問題を確認しておきたい。

### 3. 〈私〉の承認願望と自己嫌悪

小学生の時に受けた性被害の回想が終わると、物語の中心は〈私〉の現在の大学生生活へと移り、もう一つの物語が語られていく。それが、〈私〉の承認欲求の話である。大学生になった〈私〉は女装するようになり、メイクやコーディネートの研究を重ねながら、自分を本物の女性に近づかせようとする。そうしたなか、〈私〉は度々美しい女性への羨望の気持ちを口にし、自らが女装するようになったのは、その美しさを手に入れるためだと開示している。では、〈私〉がその美しさを執拗に求めるのは、一体どのようなことを意味するのだろうか。

まず注目したいのは、〈私〉が女装して美術館に出掛けるエピソードで、〈私〉が美術館に展示されている映像作品に映った女性を目にして語った思いである。

女は服装も髪も適当で、たぶんメイクもしていなかった。それなのに、私は女を見て勃起

していた。性器を勃起させながら、私は悔しかった。女は、私よりもずっと美しかった。それはおそらく誰もが認めるところだし、私もできることならあのようになりたかった。あのような美しい姿で生まれたかった。美しい顔や脚を持ち、見る者を魅了したかった。どうして、私は美しくないのだろう。必死になってメイクの研究をしても、いまだ遠く及ばない。もっと努力すれば、もう少しくらいは美しくなれるかもしれないが、限界がある。それ以上を求めるとすれば、薬や整形に手を出すことになるのだろうか。(62頁)(下線強調は引用者)

「私は女を見て勃起していた」という表現からも推測できるように、〈私〉の求める美しさは女性性と強く結びついているものだと考えられる。であるならば、「どうして、私は美しくないのだろう」というのも、「限界がある」というのも、容姿の優劣についてあれこれ悩むというだけではなく、男の身体に生まれたことへの嘆きをも意味すると理解できる。つまりその美しさを手に入れるには、自らの男性性をいかにして消去するのかが重要となってくるのである。この引用の後でも、〈私〉は女性の美しさへの羨ましい気持ちを語る場面がある。

私は、彼女たち(テレビに映っている女優)が手にしているものが美しさだけではないことを思い、しかしその多くは美しさをうまく活用することで得られたものだと考えた。一方で、醜く生まれた私には美しく生まれた人間のことなど理解できず、見当違いのことを考えているのかもしれないとも思った。(72頁)(括弧補足と下線強調は引用者)

ここでは〈私〉は美しい女性に、「醜く生まれた」存在として自分を対置させていることが確認できる。美しくなりたいという欲求が、自らの男性性を消し去りたいという願望の裏返しだとすれば、自らを醜いというコンプレックスの心理は男性性の問題に深く関係しているとも考えられる。実際、〈私〉のそうした心理は、〈私〉が女装の研究をしているときにもうかがえる。

〈私〉が新しく調達したウィッグをかぶってみるというエピソードでは、メイク自体が上手くできたのに、〈私〉は自分の顔を見て「まだどこか違和感が残っていた」と感じずにいられない。そして、一旦「マスクをつけ、顔の下半分を隠す」と、男性のようには見えなくなるため、〈私〉は「マスクで隠れている部分の処理に問題がある」というふうに、違和感の原因をマスクで隠れる部分に求める。マスクで隠れる部分というのは鼻と口元だと思われるが、メイクでもカバーするのが難しいという点を考慮すれば、〈私〉が問題視しているのはおそらく鼻であろう。その鼻こそ〈私〉の顔のなかで、もっとも男らしいかつコンプレックスを感じさせるパーツだとするのならば、このエピソードは、〈私〉がいかに自らの身体の男性的な特徴に対して違和感を覚えており、それを肯定できないでいるのかを表している。

西井開によると、男性の身体嫌悪は二種類の嫌悪感が絡まって構成されている。一つ目は、自らの身体の女性的な特徴に向けられている。

男性中心社会で「女であること」には否定的な意味が持たされているため、ほかの男性を「女性化」することは「不完全な男」という劣った存在として位置づけて貶めることを可

能にする。男性が自身のなかに見いだす女性的特徴を嫌悪する背景には、こうした男性内の力学がはたらいっている。(ぼくらの非モテ研究会、前掲書、126頁)

そしてもう一つはその逆、つまり男性的な特徴への嫌悪である。

その一方で、男性が自己の身体の「男性的な」特徴に対しても否定的な感覚を持つことがあるという事実を見逃してはならない。男性たちは、二重に身体を嫌悪している。(ぼくらの非モテ研究会、前掲書、126頁)(傍点強調は原文)

上野千鶴子の言葉を借りれば、この二つの種類の自己嫌悪は、それぞれ「自分がじゅうぶんに男でないこと」へのものと、「自分が男であること」へのものというふうに整理することができる<sup>17</sup>。後者が特徴的なのは、その否定的な感覚は、男らしくないことへの懸念によるものではなく、むしろ男らしい身体を持っているからこそ生じるものである。西井は男性の脱毛経験を例として挙げ、「それは自分の身体を美しくしたいというポジティブな心理からではなく、むしろ毛深い自分の身体から逃れたい一心でなされている場合が多い」(ぼくらの非モテ研究会、前掲書、126頁)と、その特徴的な心理をある種の脱身体化の願望として捉える可能性を示唆している。そうした願望が、理想的な身体への同一化の願望を意味するのならば、それで行われる女装行為というのは、もはやジェンダーの越境を目的とはしていない(上野、前掲書、296～297頁)。だから、〈私〉は自らの女装行為に関して、「私は、美しくなりたいだけだった。男に好かれたいわけでも、女になろうとしたわけでもなかった」と強く断るのであろう。

女装することが、男性性を脱ぎ捨て理想的な姿になることを意味するのなら、〈私〉が美しくなりたいのは、理想的な自分に化して他者からの承認をもらおうとするからである。そして、この点は〈私〉が男性としての自分を承認できないという困難を抱えている、ということを如実に物語っている。

美しさは女性性そのものに緊密に関係しているという、〈私〉の論理を確認してきたが、そうした論理は〈私〉のバイト仲間のつくねには適用しない。〈私〉とつくねの関係性において興味深いのは、〈私〉はつくねの容姿を醜いとしつこく語るという点にある。

つくねの顔立ちは、整っているとはいえない。上の前歯がいくらなんでも前に出すぎているし、目は小さい。鼻は下向きの矢印のようなかたちをしていて気持ち悪いし、輪郭もなんだかいびつだった。(58頁)

こうして正面からしっかりとみるつくねの顔は、やはり美しくなかった。(65頁)

つまり、〈私〉による美しさの論理は自らの男性性を貶めるためのものだけではなく、女性を美醜の価値判断で分断するものでもあったのだ。その美醜の価値判断によって、〈私〉はつくねを「人生のあらゆる局面で、死ぬまでずっと損をし続けるのだ」とみなし、自分と同じく美しくない者として同情を示すこともあるが、男性としてつくねを軽蔑・欲望をせずにはいられない。醜いと思う女性を欲望することに走るというのは、一見矛盾に満ちているように見えるが、そうした、〈私〉のつくねへのねじれた感情は、女性を性的対象としかみていないという



ミソジニーの論理を体現していると思われる。次の節では、〈私〉の男性性問題とミソジニーの関わりについてさらに考察してみたい。

#### 4. 不完全な男性としての不安とミソジニー

じつは、〈私〉は「自分がじゅうぶんに男でない」、ということにも不安を感じていた。この点は、〈私〉がセックスに異様に執着するエピソードから読み取れると思われる。

〈私〉は、よくデリバリーヘルス店を利用しており、いつもその店に勤めているセックスワーカーのカオリを指名している。〈私〉が性的サービスを利用する際、カオリしか指名しないのは、「カオリは初めてで勝手のわからない私を優しくリードし、緊張をほぐそうとしてくれた」からだということから、〈私〉は女性と性的関係を結ぶのに経験が乏しいと思われる。そして、おそらくカオリが〈私〉の性的行為を行なえる唯一の相手だと推測できる。そのようなカオリが急に仕事を休むと、〈私〉は非常に落ち着かない様子を見せる。

このような説明のない長い休みは初めてで、私は落ち着かない日々を過ごすことになった。

[...] 一日に何回もデリバリーヘルス店のホームページにアクセスするようになり、出勤予定表にカオリの名前がないことを確認しては落胆した。そして在籍一覧のページを見ては、カオリがまだ店を辞めていないことを知って気を取り直した。自分でも馬鹿みたいだと思っただけれど、そうせずにはいられなかった。カオリがもっと長く店を休んでいたら、私はもしかして精神を病んでいたかもしれない。 (62 頁) (下線強調は引用者)

なぜカオリに会えないことは、〈私〉にこれほどまでに不安を感じさせるのだろうか。カオリと会うことが性欲の解消のためだとしても、〈私〉はカオリに会えない間、毎日自慰行為をしており、それに対して満足感も覚えている。つまり、カオリと会わなくてもそれで性欲の解消は十分できるはずだ。そうであれば、カオリと会うことは、〈私〉にとってほかに特別な意味があると考えられる。

女性と性的関係を結ぶことは、男性にとって男性性の達成の重要な要件である。男性であるということは、「自分の責任において主体的に活動を行うこと」と、「女性に対して性的欲望を持ち女性を獲得しようとする事」（江原、前掲論文 [2012 年]、26 頁）を必要条件とするとされているのだが、後者は〈ホモソーシャリティ〉の概念からさらに説明できる。

セジウィックの「ホモソーシャリティ」の概念によれば、男は女に選ばれることによって「男」になるのではない。男は男同士の集団のなかで正式のメンバーとして認められることで初めて男になるのであり、女はその加入資格のための条件、もしくはそのメンバーシップに事後的についてくるご褒美のようなものだ。「彼女がいる」とは、「女をひとり所有する」すなわち文字どおり「所有にする」状態をさす。他のすべての要因において欠格であっても、最後の要因、女がひとり自分に所属していることだけで、男が男であるための

ミニマムの条件は満たされる。(上野、前掲書、72頁)

この論理においては、女性は男性間の絆を維持し、男性の男性性を達成するための道具のような存在でしかないが、そのような女性をひとりも所有できていない男性は、ほかの男性から認められず、不完全な男性として見られてしまう。そうした男性にとって、買春というのは、「女性の身体を占有するための、少なくとも一時的に占有するための」<sup>18</sup>代償行為として行われるのだ。であるならば、〈私〉がカオリの急な休みに対して不安を覚えるのは、それで自らの男性性を保つ術を失うからだ、と解釈することができよう。〈私〉は知らず知らずのうちに、男性性規範を取り憑かれたかのように内面化していたのである。

それをふまえて、先ほど論じた、〈私〉の鼻への違和感・否定的感情についてあらためて考えてみると、鼻を男性性の象徴だと見なせば、それに対する違和感・否定的感情は、〈私〉の男性性そのものに向けているものだと解釈できる。つまり鼻を何とかしたいという気持ちは、自分の不完全な男性性への苛立ちとしても読めるのだろう。

一方、カオリが性的経験のない〈私〉を「優しくリードし、緊張をほぐそうとした」(傍点強調は引用者)のも、〈私〉がカオリにこだわる理由の一つだと考えれば、〈私〉はカオリとの関係性を通してじぶんを無条件に受け入れてくれる存在を求め、それで安心感を得ようとしているとも考えられる。そのような、ある種の甘えとも言える〈私〉の依存感情からみれば、カオリは〈私〉にとって性欲の捌け口であると同時に、理想化された母性を体現した存在とも言えるのではないだろうか。

しかし言うまでもなく、女性を性的対象としてしかみていないことも、女性に母のようなやさしさを一方的に求めることもミソジニーであり、それでは健全な関係性を築くことは到底できない。〈私〉の女性と関係を築くことの困難さは、カオリが〈私〉に自らの心境を吐露する場面において顕著に浮かび上がってくる。

カオリは〈私〉と久しぶりに会った際、思わず〈私〉にお客さんへの愚痴を口に、それを喋っているうちに自らの悩みをも打ち明けてしまう。だが、自分が老いていくことへの不安を話すカオリを目の前にして、〈私〉はそれに対して掛ける言葉を探す様子もなく、ほぼ無関心な様子で聞き流しているように見える。女性との関係において、〈私〉のコミュニケーション力が欠けているということが露呈する状況は、つくねとの間にも起きている。

〈私〉は、つくねのストーカー被害の相談になった際、つくねが一人暮らしだということを出し、下心で「お前、今日は誰かと一緒にいたほうがいいよ」と、つくねに自分を部屋に泊らせることを提案する。つくねの了承を得て泊まることになるが、〈私〉はつくねの部屋でシャワーを浴びることになると、もう頭のなかがセックスのことがいっぱいになり、ほかのことを考える余裕がなくなってしまう。シャワーを浴びた後も、寝袋に入った後も、〈私〉はどうやってセックスに持ち込めばいいのかと必死に考える。そうしたなか、つくねはふっと自分の小学生の頃の話語り始める。つくねがそこで語ったのは、ブスであることの葛藤と、他

人に自分の存在を認めてほしいという承認欲求である。つくねの抱え込んでいる悩みは、〈私〉のそれとじつに似ている。しかし、〈私〉は「目を閉じてつくねの声を聞きながら、行動を起こすなら今なのだろうと考えていた」（傍点強調は引用者）というように、つくねの話に全く集中しておらず、ただただセックスする時機をうかがっていた。このように〈私〉は、互いの悩みを開示し合うことを通して、つくねと関係を深める機会を逃したのである。

こうしてみると、〈私〉の女性との関係の問題は、コミュニケーション力の問題というより、「女性に対して性的欲望を持ち女性を獲得しようとする」という男性性規範の内面化による弊害だといえよう。しかし、そのことを通して自らの男性性を保とうとする〈私〉は、この弊害には気づいていないのである。

## 5. 男性性をめぐる傷と向き合う

さて、〈私〉の男性性の問題を描いた二つの物語を確認してきたが、一つ目の物語では、〈私〉は男らしくないとされたため、暴力に晒され傷つけられてしまう。そして、もう一つの物語では、〈私〉は男性である自分に否定的感情を覚えており、自らの男性性を消し去りたいと思うと同時に、それを補完するための行動にも出ている。そして小説の終盤では、〈私〉はこうした傷と葛藤と向き合う転機を迎える。

〈私〉は女装の研究を重ねた末に、とうとう女装姿の自分を誰かに認めてもらいたいという欲求を制御できなくなってしまう。そこで、〈私〉はカオリを呼び、熱心に仕上げた女装の姿を見せた。ところが、カオリは〈私〉の行動を性癖だと勘違いし、〈私〉の望んでいないこと、言ってみれば性的加害のようなことをしてしまう。それが原因で二人の間にトラブルが起き、〈私〉は部屋を飛び出て女装姿のまま街を徘徊する。どこに行けばいいのかわからない〈私〉は、つくねに自分の女装姿を見せようと考え、連絡を入れる。そしてつくねの部屋に向かう途中で、〈私〉は二十代後半くらいの男性に口説かれる。だが、その男は〈私〉が男性だということに気づくと、態度を豹変し、〈私〉を女装する変態呼ばわりする。そして、無理矢理に〈私〉を公園の多目的トイレに連れ込み、暴行まで加えてしまう。

〈私〉が再び性暴力に遭う経緯は以上のようなのだが、まず目を向けたのは、暴力そのものがどのように再演されるのかということである。男は〈私〉の鼻のあたりを強く殴ったり、腹を踏んだりした後、次のようなことを口にする。

きれいな女がさ、ナンパしているオレを見下しきったような目で見るとはまだわかるよ。腹立つけどな。調子乗ってんじゃねえってもちろん思うけど、もう慣れたし。でもさ、なんでお前みたいな気持ち悪いやつにまで、そんな目で見られなきゃいけないんだよ。[...] まあ、いいよな。多少殴ってもさ。女じゃないんだから。女だったらオレも殴らないよ？ それはなんていうか、男として絶対やっちゃいけないことだって思うし。でもさっきは女

殴ってるみたいで興奮したわ! (80頁) (下線強調は引用者)

引用の通り、男は明らかに女装した〈私〉を女性として見立て、暴力を振るうことで鬱憤を晴らそうとしていた。そしてこの後、男は〈私〉にオーラルセックスを強要するが、言うまでもなく、そのオーラルセックスは一回目の被害の時のそれと同じように、力を誇示するためのものと思われる。さらに注目したいのは、男は〈私〉にオーラルセックスをしてもらっている時より、〈私〉に手を出した時のほうが、ずっと興奮しているように描かれているということである。例えば、男が逃げることを試みた〈私〉を捕まえて首を絞める場面でも、男の愉快的笑い声と勃起した性器が強調され、暴力を振るうことを興奮しながら楽しむ男の姿が鮮明に語られている。

こうした男の行動は、女性ジェンダーを体現する〈私〉を痛みつけることを通して、女性を下位に位置付けて支配する欲望を満たそうとするものだと考えられる。こうした場合、男がオーラルセックスを強要するのは、やはり性欲の解消を目的としたものではなく、あくまで支配欲による暴力の延長線上で行われる行為だと理解できる。つまりここでも性欲ではなく、支配欲を満たすための暴力が浮き彫りになっているのである。

性暴力の再演は、過去に暴力に対して抵抗できなかった〈私〉に、抵抗の機会を再び与えることにもなる。オーラルセックスをさせられる〈私〉は恐怖や嫌悪を感じながら、次のように思った。

私はこれ以上のそんなことを続けたくはなかった。本当にやるべきことは恐怖や嫌悪の原因を根本から取り去ることで、そして今ならそれは難しくなかった。私は男の性器に前歯を当て、思い切り強く噛んだ。(82頁)

「恐怖や嫌悪の原因」としての男性器は、まるで「悪の権化」のような、バヤシコの性器を想起させる。ここの抵抗は、かつて無力で抵抗できなかった自分の救済につながる行為として読めるのではないだろうか。この読みの可能性は、〈私〉がトイレから脱出することを試みるも、男に捕まって首を絞められている際、〈私〉の取った行動からも感じさせる。

恐怖に突き動かされるように、ヒールの部分でスニーカーを履いた男の足を踏んだ。一度だけではなく、間髪を容れずに何度も踏んだ。アイスピックで氷を削るときのような感触を足に感じた。今の私にとって、この細いヒールが唯一の武器だった。私にはこの靴が、このような男の足を踏むために作られた道具のように思えた。(83頁)

ハイヒールで攻撃を仕掛けるのは、じつに象徴的なことである。ハイヒールを女性性の象徴だとするならば、ここのくだりは、「受動性というイメージが付与された「被害者 (victim)」を否定し、より能動性・主体性を強調する「エージェント (agent)」であることを是とする」<sup>19</sup>という、女性の主体性を肯定するフェミニズムの議論を連想させる。そうした論理は、性暴力の被害を受けた、つまり女性化された存在の〈私〉が、より能動性を持つ存在へと変わりつつある可能性を示している。

そして、二度目の性暴力被害から生き延びることは、〈私〉に承認欲求と自己嫌悪を乗り越える契機をももたらす。ハイヒールによる攻撃が功を奏し、〈私〉はやっと男から逃げる事ができた。必死の思いでトイレから離れた〈私〉は鼻から伝わってくる痛みに気づく。

恐る恐る触ってみると、さらに激しい痛みを感じ、思わず手を離した。骨が折れているのだろうか。心なしか、かたちもおかしくなっていた。私は、まだトイレにいるであろうあの男への強い怒りを感じた。私だって自分の鼻のかたちが好きだったわけではないけれど、それでもこれはほかの誰でもない私の鼻であって、私以外の人間にそれをどうこうしている権利などなかった。 (83頁) (下線強調は引用者)

こうした〈私〉の思いを受け止めるために、杉田俊介による男性批評の論考を参照したい。杉田は、自己否定に陥っている男性に向かって以下のように説いている。

たとえ愛や承認を得られず、誰かから抱きしめられず、ルサンチマンや自己嫌悪をずっと解消できなくても、それらを抱えたまま、しかしそれを他人や自分への過度な暴力にしてしまうことなく、こじらせることなく生きていく、そこそこ幸福で楽しく生きていく、そうした生き方もまたありうるのではないか。大切なのは、他者への暴力が許されないだけでなく、自分の身体への暴力もまた許されない、ということではないか。<sup>20</sup> (下線強調は引用者)

〈私〉は鼻以外も殴られたにも関わらず、鼻の傷だけが焦点化されているのは興味深いことである。鼻は、〈私〉の顔のなかでもっともコンプレックスを感じさせるパーツだということを考えれば、それが傷つけられたことに対して怒りを覚えるのは、コンプレックスを自らの一部として受け入れようとしていることを意味する。そして、自分の身体に降り注ぐ暴力を許さないことが、自己否定されてきた自分との和解につながるとするのなら、その怒りは、〈私〉がすでにそのことに気づきはじめているということをも物語っているのだ。

〈私〉は自分が受けた理不尽な暴力に怒りを覚えながら、鼻が治るかどうかについて考える。

鼻は、ちゃんと治るのだろうか。もし治らなかったら、そのときは、いっそお金を貯めて整形でもするしかない。いい機会なのかもしれない。整形は、何かきっかけがなければ、なかなか踏ん切りがつかないだろうから。(84頁)

鼻を治すための整形は、自らのコンプレックスと向かい合い、自分を肯定する契機をもたらすものとして理解できる。一方、鼻を男性性の象徴だと読む場合、鼻血の流れる鼻は、〈私〉が暴力に晒されるたびに、〈私〉の男性性がどれほど傷つくのかということを示唆しているのではないだろうか。〈私〉の受けてきた暴力というのは、バヤシコと男による他害行為だけではなく、男性性規範に従おうとすることも含まれていると考えたい。そうすることで、〈私〉は男性性規範を内面化し、懸命に守ろうとするも、なかなか達成できないという現実<sup>21</sup>に傷つけられている、という読みの可能性が見えてくる。言ってみれば、それはある種の自傷行為ともいえよう。この意味で言えば、〈私〉がカオリに会えない間に異常に不安がっていたのは、暴力

に晒されている状態の表れとして再度理解することができる。

男性性の象徴である鼻を、治すことないし整形することは、自らの傷ついた男性性と向かい合い、修復、もしくは修正することである。その上で、さらに注目したいのは、〈私〉が鼻血で汚れた洋服を洗うことを、鼻を治すことと同じく大事なこととして捉えるということである。

こんなに汚れてしまったけれど、お気に入りの服だから捨ててしまいたくない。私をきれいに見せてくれる、私の大事な洋服。こんなひどい日にも私と一緒にいてくれた。[...]やはり救急車を呼ぶよりも先に、つくねの家に行きたかった。できることなら洗面所か浴室を貸してもらい、汚れが取れなくなってしまう前に、この手で服を洗いたかった。(84頁)

(下線強調は引用者)

〈私〉はこれからも女装をするかどうかに関して、作中では語られていないが、女装服を大事に取っておきたいというのは、女装する自分も女装すること自体も否定しないことを意味していよう。このことが、〈私〉が自分の傷と向き合い、未来へと進んでいくという文脈において語られるのは、非常に意味のあることである。それは、人生の次の段階へと進みながらも、「こんなひどい日」があったこと、つまり性暴力に遭ったことや、自らを肯定できていないといった過去の負の経験を切り捨てようとせず、そういった苦い経験とともに生きていくという姿勢を見せているのである。

さて、〈私〉の自らの傷に向かい合う契機をみてきたが、最後はこの小説の結び方に目を向きたい。結末の直前では、鼻血を垂らしている〈私〉が洗面所か浴室を借りようと、つくねにふたたび電話すると、つくねの電話越しの心配そうな声は、「心地いい声」として〈私〉に聞こえてくる。この描写は、以前〈私〉がセックスしたいがために、つくねの声を何とも思わずに聞き流していたということとは対照的であり、〈私〉がつくねに心を許す瞬間を表していると読めよう。そして『改良』は、〈私〉とつくねの関係が変化していくであろうことをほのめかしたところで、静かに幕を閉じるのだが、物語の最後に〈私〉は以下のような思いを語る。

つくねは、私の姿を見て何と言うだろうか。間違っても、きれいだとは言わないだろう。しかし、それも今となっては大した問題ではなかった。大事なものは服を洗わせてもらうことで、それから病院に行って鼻を治すことだった。鼻の痛みを耐えながら、一歩ずつゆっくりと歩く。角を曲がると、つくねが住んで言うアパートがみえた。(84頁)(下線強調は引用者)

〈私〉が女装するのは、理想的な姿を手に入れて他者に承認を求めためである。しかし結末では、〈私〉は悲惨な姿をしているのにもかかわらず、それがつくねに見られることに対して抵抗感がない。〈私〉は、服を洗うことと鼻を治すことがずっと大事だと語る。他者による評価より、服を大切にすることと鼻を治すことといった、自分をいたわる行為を優先するのはまさに、今まで自分を肯定できなかった〈私〉に、転機が訪れていることを意味していると言えるだろう。

ただ、こうした結末の読み方に関して同時に考えなくてはならないのは、そこで暗示される〈私〉とつくねのこれからの関係性である。自らの傷と向き合う〈私〉のたどり着くべき場所がつくねのアパートだ、ということを考えると、つくねがカオリに代わって〈私〉の心の拠りどころになるということは明らかであろう。つまり、その結末で暗示される〈私〉とつくねのこれからの関係性は、男性が女性に対して心の拠りどころを一方向的に求めるということの反復である可能性が否めない。そして、そのことが〈私〉の内面化した男性性規範をこっそり正当化し、〈私〉のなかのミソジニーを不問に付してしまう可能性も十分に考えられる。

ただ、結末直前の〈私〉とつくねの電話でのやり取りを思い返せば、〈私〉はつくねと心の傷を分かち合い、つくねとの関係において女性と良い関係性を築くことを模索していく、という読み方もまたできるのではないだろうか。『改良』を、〈私〉の傷つきの物語として読んできた本稿は、あえて後者の読み方で本作品の結末を受け取りたい。もちろん、この受け取り方はミソジニーの温存という恐れを否定するものではない、ということは断っておく。

## 6. 終わりに

本稿は、〈私〉の性的被害経験と他者承認欲求を男性性の問題として捉えなおし、『改良』を、男性性問題をテーマとした小説として読み直すことを試みた。〈私〉は、男性であることで葛藤を覚えるも、不覚にも男性性規範に囚われていた。そのような〈私〉の生きづらさは、男性ジェンダー化された個人的経験であり、誰しも経験し得る、〈普遍的〉なものではないと思われる。〈私〉の生きづらさと男性性規範の関連性を追うことを通して、『改良』を、ジェンダーについて描いた作品として再度位置づけることができた。

それから、本作品にみる性暴力の問題を男性性の視点から読み込む意義をあらためて述べたい。〈私〉は性暴力を受けた際、男性性の象徴である、勃起したペニスに対して怒りを覚え、その暴力性をきっぱりと告発しているが、このことは本作品において注目に値する、重要な出来事である。〈私〉の被害経験によって浮き彫りになったのは、男性性の暴力性なのだが、それを男性の〈私〉が否定するのは、女性が否定するのとは意味が異なっていると思われる。男性としての弱さ・傷を語りながら、〈男性〉の内部から暴力性の問題を突き上げるのは、男性性が一枚岩ではなく、複数であるということを示し、暴力に依拠するという男性性のあり方を問いなおすことにつながるのである。したがって、本作品は〈私〉自身の暴力性ないし加害者性をどのように捉えるのかという問題が必然的に浮上してくる。最後に、この問題について考えたい。

〈私〉の被害者性を拾う本稿の分析の作業は、意図せずも〈私〉が被害者であるということ、肥大化させてしまう恐れがある。しかし、〈私〉の女性との関係性からも分かるように、本作品は決して、加害者と被害者を二分法的に捉えた小説ではない。例えば、〈私〉は性暴力

の被害者でありながら、じつはカオリを搾取する側の人間でもある。そして、本稿では紙幅の都合で取り上げていないが、〈私〉が街を徘徊しているとき、中年女性の歩行者を尾行することを楽しんでたというエピソードも、〈私〉のなかの加害性を明白に語っている。つまり、〈私〉のなかには加害性と被害性が折り重なっているのである。杉田俊介によると、暴力を批評する際に重要なことは、自分のなかの加害性をも等閑視せず、「加害と被害の重層性から言葉を練り上げ」ることである<sup>21</sup>。そうであるならば、〈私〉にとっていかにして自分の加害者性にも向き合うのかは、重要な問題となってくる。この点に関して、〈私〉が二回目の性暴力を受けた際、ふたたび被害者の立場に立たされ、カオリへの謝罪の思いを一瞬浮かべる場面があるということを考えると、〈私〉はまだ自分の加害性を十分に自覚していないとしても、この小説が〈私〉の経験を言語化する際に、「加害と被害の重層性」にも目を配り、〈私〉を単なる被害者として描こうとしているわけではないことにも、また目を留めておきたい。

<sup>1</sup> 磯崎憲一郎・遠野遥（2019）「受賞記念対談 圧力と戦う語り口」『文藝』58（4）、河出書房新社、107頁

<sup>2</sup> 川本直（2019）「青白い炎は冷たく燃える」『週刊読書人』2019年12月13日号（参照元：<https://dokushojin.com/review.html?id=7285>）

<sup>3</sup> 斎藤美奈子（2019）「「痛さ」が孕む普遍性」『文藝』58（4）、河出書房新社、91頁

<sup>4</sup> 宮崎浩一（2021）「男性の性被害とはどのように生きられるのか」『Gender and Sexuality』（16）国際基督教大学ジェンダー研究センター、32頁

<sup>5</sup> リチャード・B・ガートナー [編著] 宮地尚子・他 [訳]（2005）『少年への性的虐待——男性被害者の心的外傷と精神分析治療』作品社

<sup>6</sup> 江原由美子（2012）「社会変動と男性性」、目黒依子・他 [編著] 『揺らぐ男性のジェンダー意識 仕事・家族・介護』新曜社、26頁

<sup>7</sup> 熊谷珠美（2019）「男性の性被害はなぜ認知されにくいのか？ セクシュアル・トラウマ・インフォームド・ケアの提案」『季刊女も男も：自立・平等』（134）、労働教育センター、88～91頁

<sup>8</sup> 西井開（2020）「男性の被害経験」、ぼくらの非モテ研究会 [編著] 『モテないけど生きています 苦悩する男たちの当事者研究』青弓社、96～98頁

<sup>9</sup> 江原由美子・山田昌弘「セクシュアリティ」、目黒依子 [編著]（1994）『ジェンダーの社会学』放送大学教育振興会、61頁

<sup>10</sup> レイウィン・コンネル、伊藤公雄 [訳]（2022）『マスキュリティーズ』新曜社、102頁

<sup>11</sup> 古川誠（1996）「同性愛の比較社会学——レズビアン／ゲイ・スタディーズの展開と男色概念——」『セクシュアリティの社会学』岩波書店、120～121頁

<sup>12</sup> 藤岡淳子（2006）『性暴力の理解と治療教育』誠信書房、14頁、15頁

<sup>13</sup> 伊藤公雄（1993）『〈男らしさ〉のゆくえ——男性文化の文化社会学』新曜社、166～167頁

<sup>14</sup> 以下、「改良」を引用する際は引用文の後に『文藝』58（4）のページ数のみ記述する。

<sup>15</sup> 吉田博美（2008）「性暴力被害者のメンタルヘルスと治療」、小西聖子 [編] 『犯罪被害者のメンタルヘルス』誠信書房、2010年、162頁

<sup>16</sup> 加藤秀一（2017）『はじめてのジェンダー論』有斐閣、142～143頁

<sup>17</sup> 上野千鶴子（2018）『女ざらい ニッポンのミソジニー』（朝日文庫）朝日新聞出版、297頁

<sup>18</sup> フランソワーズ・エリチェ [著] / 井上たか子・石田久仁子 [訳]（2016）『男性的なもの／女性的なものII 序列を解体する』明石書店、289～290頁

<sup>19</sup> 井上瞳（2021）「性暴力被害とトラウマを再考する 新自由主義とポストフェミニズムの観点から」『未来共創』大阪大学大学院人間科学研究科付属未来共創センター、46頁

<sup>20</sup> 杉田俊介（2016）『非モテの品格 男にとって「弱さ」とは何か』集英社、128～129頁

<sup>21</sup> 杉田俊介（2008）「性暴力についてのノート」『フリーターズフリー』2、人文書院、177頁